ドイツ社会地理学の主要概念

斉 藤 光 格*

Bemerkungen zu den wichtigsten Begriffen der deutschen Sozialgeographie

Mitsunori SAITO

ZUSAMMENFASSUNG

Wenn die Sozialgeographie in Deutschland auch methodologisch fruchtbar scheint, herrschen doch darüber noch viele Unklarheiten und ihre Stellung und Bedeutung sind vielfach umstritten. Der Verfasser möchte in diesem Aufsatz die drei wichtigsten Begriffe der deutschen Sozialgeographie prüfen, um zu ihrer weiteren Entwicklung beizutragen.

Der Begriff "Gruppe" oder "Sozialgruppe" in der Soziologie ist mehrdeutig und bei seiner Definition sind nach dem II. Weltkrieg besonders in den Vereinigten Staaten (group), in Japan (shakai-shūdan) und in Deutschland auch im steigenden Maß das Wir-Bewußtsein, die Häufung des sozialen Handelns oder Verhaltens, der Gruppenzwang, die Norm usw. als Merkmale betont, während eigentlich in der Sozialgeographie Gruppen der gleichartig handelnden Menschen oder Lebensformengruppen, die in der Soziologie als Merkmalsgruppen, Pseudo-Verbände oder quasi-groups von den echten soziologischen Gruppen unterschieden werden, immer die wichtigsten sind.

Diese Unterschiede stammen aus den unterschiedlichen Fragestellungen auf die menschlichen Gruppen in den beiden Wissenschaftsbereichen. Deshalb wäre es besser, daß der Geograph das Wort "menschliche Gruppe" wie im Bobeks früheren Aufsatz "Stellung und Bedeutung der Sozialgeographie", oder vielmehr ein neues Wort wie "sozialgeographische Gruppe", gebraucht. Dabei müßte immer gewarnt werden, die menschliche Gruppe im sozialgeographischen Sinn nicht ohne weiteres mit der Gruppe im soziologischen Sinn zu verwechseln und mit dem Gruppenzwang usw. zu verbinden, obwohl sie gegebenenfalls als Ergebnis der Untersuchung der soziologischen Gruppen gleichzusetzen wäre.

Da soziale und landschaftlich geprägte Lebensformengruppen oder Gruppen des gleichartig handelnden Menschen die Gesellschaften im sozialgeographischen Sinn (Sozialkörper, komplexe Sozialkörper, Sozialgruppengefüge, Gesellschaftskörper) zusammensetzen, müssen die Fragestellungen auf die Gesellschaften in den beiden Wissenschaftsbereichen auch für eigentlich unterschiedlich angenommen werden. Das Gleiche gilt auch für den

* 神戸大学文学部

Begriff “Sozialraum” (sozialgeographische Einheit, sozialgeographische Raumeinheit, sozialgeographischer Raum), z. B. den Raum der temporären Almwandlungen, den Raum der Realteilung, American Manufacturing Belt, Megalopolis usw.

Trotz den vielen Unklarheiten ist die sozialgeographische Betrachtungsweise, so glaubt der Verfasser, fruchtbar, wie Busch-Zantner, Bobek usw. schon betont haben.

ま え が き

自然地理学と人文地理学との関係については議論が多く、両部門ともに専門化し、分離する傾向にあることは否定出来ない。しかし地理学本来の性格からも、また現実が生じつつある地域整備や環境の問題に1つの視点を提供するためにも、何らかの形で両者が協力出来ることが望ましい。

1961年のケルンにおけるドイツ地理学会大会で社会地理学をめぐる講演と討論が行なわれた際¹⁾、トロールは社会地理学は全文化・人間領域の事象を統合するに適した観点で、自然地理学でいうなら、彼の提唱した景観生態学 *Landschaftsökologie* に当ると評した。また両者共にそれぞれ人文地理学と自然地理学のみを指向して居らず、両者の綜観的目的設定を最もよく表現していると思う、とも述べている。

ドイツの社会地理学は戦後ボベックの提唱以来急速に発達したが、その目的、問題設定や方法にはなお混乱が少なくない。ここではその主要概念を整理して、それが主張する自然環境考察の社会地理学的視角について論じたい²⁾。

I 社会集団

シュトルケバウムによれば、「地理学の社会事象に対する関心は、社会 *Gesellschaft* と集団 *Gruppe* の両主導概念によつて、十分とはいえないにしても、最も手つとり早く表現される³⁾。」説明の都合上、ここでは集団の概念から検討したい。

ボベックは最初に社会地理学の必要性を論じた時⁴⁾、社会集団 *soziale Gruppe*, *Sozialgruppe* という語は一切用いず、もっぱら集団 *Gruppe* 集団への組分け *Gruppierung*, 人間集団, *menschliche Gruppe*, *Gruppe von Menschen* という語を用いた。その説明によれば、人間集団とは地域において活動し、同種の行為をなす集団 *Gruppen gleichartig handelnder Menschen* である。ただしこれは地理学であまり関心を持たれず、地理学によつて確立され、基礎に置かれた人間の集団への組分けは、ヴィダル（・ド・ラ・ブラーシュ）以来一様な生活形態による組分け、すなわち生活形態集団 *Lebensformengruppe* であつた、としている。

集団の機能と類型を知るために、ボベックはさらに純粋ないし理論社会学、特にゾンバルトの集団の分

1) Deutscher Geographentag Köln, 22. bis 26. Mai 1961, Tagungsbericht wissenschaftliche Abhandlungen, 1962, pp. 185-186.

2) ドイツの社会地理学については、最近森川による紹介的な概観が公表されている、合わせて御参照いただければ幸いである。

森川洋(1973): 西ドイツ・オーストリアの地理学の動向。人文地理, Vol. 25, No. 2, pp. 57~84.

3) STORKEBAUM, Werner (1969): Einleitung. (in: STORKEBAUM, W. (Hrsg.): *Sozialgeographie, Wege der Forschung*, Bd. LIX, Darmstadt, p. 14.

なお *Sozialgeographie* に再録されている諸論文を引用する際には原典を省略し、発表年と *Sozialgeographie* の中での頁数のみを掲げる。

4) BOBEK, Hans (1948): Stellung und Bedeutung der Sozialgeographie, *Sozialgeographie*, pp. 44-62.

類を引用している⁵⁾。それに付したボベックの説明によれば、団体のみならず指標集団や統計集団も地理学的には重要である。ボベックの言う生活形態がゾンバルトの言う生活様式 *Lebensweise* (指標集団に分類されている) とどのような関係にあるかには触れられていないが、文脈の中で判断するなら前者の方が広い概念である。そしてボベックによれば生活形態の概念はヴィダル *genre de vie* の概念以来発展したものである。

ハルトケは1962年の社会地理学に関する方法論的な論文においてもつばら社会集団の語を用い、かなり長い説明を付している。その論旨はおおよそ次の如くである⁶⁾。

文化地域 (ないし景観。一ドイツ地理学の論文では、現在もラントシャフトの語は類型地域と景観のどちらを意味しているのか不明の場合、ないし明らかに景観を意味している場合が少なくない。——引用者註) は社会集団に属する人間の生活と行動 *Verhalten* の結果形成されたもので、その行動は集団強制 *Gruppenzwang* に発している。社会諸科学の発展が遅れたため、その形成の過程には不明の部分が多いが、社会集団はみずからに適合するような土地や自然への評価の体系を持ち、それに属する個人はこの評価の体系に合わせて土地や自然に働きかけ、これを変形し、一定の痕跡を残す。したがってこの痕跡はその社会集団の指標として地理学的には価値があり、その分布を区画することにより、その社会集団の占める地域、すなわち社会地理学的行動の地域を区画することが出来る。この種の区画に利用出来る統計は少ないので、これはよい方法である。このような地域を社会地理学的地域 *sozialgeographischer Raum* と名づける。これは応用地理学的にも有益である。

ハルトケはこれ以前にこの論文の前提となる調査結果をいくつか発表している⁷⁾。その論旨は一貫しているが、社会集団の語は稀にしか現われず、強く前面に押し出されたのはこの論文が最初である。その後の研究にはこの語はしばしば現われ、社会階層や職業集団 *Berufsgruppe* の意味でかなり意識して用いられているが、根底にある問題設定は一定の文化地域 (ないし景観) 形成要因としての人間の行為の同種性で、それが社会集団と構造・機能的にどのように関係するかは、意識的には分析されていない⁸⁾。端的に

5) BOBEK, Hans (1948) : 前掲書, pp. 51~52.

ゾンバルトの分類はほとんどすべての集団を団体に含めて、やや特殊であるとされているが (大塩俊介 (1958) : 集団の意味とその構造概念. 講座社会学2, 集団と社会, p. 115.), 社会学者の一般的傾向を代表して居り、以下の議論にも重要なので項目だけ掲げておく。

I 指標集団, 統計集団

II 団体 (共通性と関係が肯定的に意識されている集団)

i) 意図的集団 ii) 目的集団 iii) 理想的集団

6) HARTKE, W. (1959) : Gedanken über die Bestimmung von Räumen gleichen sozialgeographischen Verhaltens, *Sozialgeographie*, pp. 162-186.

7) HARTKE, W. (1953) : Die soziale Differenzierung der Agrar-Landschaft im Rhein-Main-Gebiet, *Erdkunde*, VII, pp. 11-27.

……(1956) : Die “Sozialbrache” als Phänomen der geographischen Differenzierung der Landschaft, *Sozialgeographie*, pp. 268-293.

……(1957) : Sozialgeographischer Strukturwandel im Spessart, *Sozialgeographie*, pp. 294-325.

8) HARTKE, W. (1963) : Die geographischen Funktionen der Hausier am Beispiel der Hausiergemeinden Süddeutschland, *Sozialgeographie*, pp. 439-471.

……(1964) : Eine ländliche Kleinstadt im Mittelgebirge im sozialen Umbruch der Gegenwart, *Raumforschung und Raumordnung*, 22 JG., pp. 126-135.

なおボベックやハルトケのしばしば用いる *Berufsgruppe* の語は、ここでは職業集団と訳したが、日本では *Berufsverband* の語があてられ、職業集団を意味する。(社会学辞典, 1969, 有斐閣, p. 454.) ドイツでは *Berufsgruppe* という語は用いられているが、同一職業を持ち、一定の所属意識のある人びと全体としている。(KÖNIG, Rene (Hrsg. 1969) : *Handbuch der empirischen Sozialforschung*, Bd. II, p. 385.)

言うなら、同一社会集団は同一行為をなすと前提されているに過ぎない。

ハルトケの1959年の論文に引続き、ボベックもシュトルケバウムも、従来の人間集団の語に替えてほとんど社会集団の語を用いるようになる⁹⁾。ここで問題となるのは、ドイツ社会地理学がもつばら依拠すると称している社会学(ちがいを強調している箇所もある)でのこの社会集団の語の意義である。

社会学においても社会集団の定義や分類はさまざまで、現代社会の動向と共にますます不明確化しつつあるとされているが、集団の理論、集団構造・機能論、大(又は包括的)社会論などとして、その研究は著しく発達、精密化している。社会学辞典その他¹⁰⁾を参考にしてみると、社会集団の語は外部から客観的な社会関係あるいはコミュニケーションの集積が見られるか、あるいは所属者に統一集団意識がある場合に用いられる。そして指標集団や統計集団のようにそれらを欠く場合は疑似集団と呼ばれ、社会集団となる基礎を有しているが、連帯意識を欠く点で真の社会集団とは区別される。

具体的な社会地理学の研究を見ると、その言うところの社会集団が社会学でいう社会集団である証明と、ハルトケの言う集団強制、あるいは一般に統一集団意識や集団規範から広範囲にわたる個人の土地・自然に対する同種の行動が生ずるという証明はほとんどなされていない。ボベックは以前にゾンバルトに依りつつ、指標集団も地理学的には重要であると述べた。またすべての一時的な形象や、純粹に個人をめぐって形成される主観的集団 *Subjektivgruppe* は、すではじめから問題ではない。最も価値があるのは、一定の制度と並んで常に生活形態集団である。とも断じている¹¹⁾。

用語や定義だけの問題なら、事はそれほど重要ではない。同じ用語にも別の定義を興えるか、混乱を避けるために別の用語を選べばよい。一般に異なる概念には異なる用語が望ましいから、ここではボベック

9) BOBEK, Hans (1962): Über den Einbau der sozialgeographischen Betrachtungsweise in die Kulturgeographie, *Sozialgeographie*, pp. 75-103.

STORKEBAUM, W. (1969): 前掲書。

10) 社会学辞典, 1958, 有斐閣, pp. 352, 651.

講座社会学, 第2巻, 集団と社会, 1958, 東大出版会, pp. 1-51, 108-186. 特に115頁の集団の定義。

金沢 実(1959): 集団分析の一展開——二, 三の方法論的課題をめぐって——社会学の問題と方法, 新明博士還暦記念論文集, 有斐閣, pp. 159-182.

広義の社会集団は、包括的社会, 特定の限られた組織集団, 小規模な第1次的集団に分類出来るが、組織集団から理論化を進めるのが科学的により多産的であるとして、そのための視点について論じている。

日本社会学会編集委員会 (1962): 現代社会学入門, p. 17. 最も厳密な定義をしている。

WEIPPERT, Georg (1965): Gruppe. (in: BECKERATH, Erwin von, u. a. (Hrsg.): *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*, p. 720).

p. 720). 我々意識を強調している。

MORTON, Deutsch (1968): Group Behavior. (in: *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 6, p. 265).

p. 265) 厳密に考えている。

以上記述や内容に構組はあるが、社会学辞典のような観点は一貫している。したがってマルクス主義者は次のように批判する。

杉之原寿一 (1970): 社会集団論, 講座現代の社会学II, 社会学理論所収, pp. 121-192.

「しかも相互作用によつて集団を規定する社会学的見地によれば、社会的地位を等しくするひとびとの間には確かにある程度共通の行動様式・生活様式・生活環境・利害関係などが存在しているが、しかし相互作用が行なわれて居らず、一定の規範の体系や一体感・連帯意識が欠けているという理由から、これらの人びとの集りは『集団』とはみなされず、『集団』とは区別されて『疑似集団』とか『表現的集団』とか『社会的範疇』などとよばれている。階級をこのように主観的・観念的にとらえ、客観的存在としてもつとも基本的・規定的である階級を『集団』としてとらえることを否定する」。

11) BOBEK, Hans (1962): 前掲書. *Sozialgeographie*, p. 85.

が最初に用いた人間集団,あるいは社会地理学的集団の語を用いたい。

より重要なことは、他の学門分野で発達し、なお未成熟で時として広狭さまざまな意味に用いられる語を転用することによつて、地理学本来の問題設定が混乱を来し、あいまい化することである。それでは地理学本来の問題設定とは何であろうか。

ボベックによれば、地理学的に重要と考えられる人間の機能 *menschliche Funktionen* (社会機能 *Sozialfunktionen*) は、古来経験によつてかなりの定度まで定まっていた。しかしこれから地理学独自の問題設定は明らかではない¹²⁾。

最も重要なのは、地理学における生活形態集団の意義である。ヴィダルの人文地理学の根底にあるのは地的統一という理念で、その1つの見方として具体的にはこれを人類と環境として把握する。その最も示唆に富んだ関係の1つは人口密度であるとして、人類の分布を詳細に検討し、説明しようとする。生活様式概念は、まず第1にその説明の手段の1つとして登場する。第2の観点は生活様式それ自体の地域的多様性で、そこでは他の現象の説明のための手段でなく、それ自身が考察と記述の対象である¹³⁾。

ボベックやハルトケでは人口密度に代って主として文化景観(や土地利用)が説明の対象で、地域形成の営力という面も時々言及されている。これは多分核心地域、機能地域や統一地域の形成を意味しているのであろう。すなわち、まずもつてこれまで欠けていた地理学における人間営力論にこれを当てようと意図している。そこに出て来るのは具体的には生活様式集団でなく、同一行動の集団、職業集団、信仰集団、土地所有集団などである。特に同一行動の集団が重要であるが、日本語として使いにくいので、ここではこれに行動様式集団の語をあてる¹⁴⁾。

ただしヴィダルやソルの場合と同じく、それ自身の特異性も地域の特徴の一要素であり、地理学的考察や記述の対象となり得ると考えている。そこでは自然環境や地域に対する受動的側面も、能動的側面ほどではないが配慮されていると判断出来る。

- 12) BOBEK, Hans (1948): 前掲書, *Sozialgeographie*, 50. 生物・経済・政治・形態・移動社会機能および文化機能を挙げている。これにはヴィンクラーの批判もあり, (WINKLER, Ernst (1961): *Zur Systematik der Sozialgeographie, Sozialgeographie*, p. 69.), これらが他の諸科学の対象であることから、地理学独自の人間集団に関する問題設定ははつきりしない。

- 13) プラーシュ著 (1922), 飯塚浩二訳 (1940): 人文地理学原理, 上巻, 岩波書店. pp. 41-48. 50, 207-208, その他いたる所。

ここではプラーシュとなつてはいるが、ヴィダルの方が正しいと飯塚は生前にわれわれに洩らされた。ソルもヴィダルと呼んでいるので、ここではそのように統一して用いた。ヴィダルは生活様式の語のあとに、「自らの生存を保証し、環境を彼の用に役立たしめる何らかの方法的なるもの」と言いかえている。ここにその主な観点がうかがえる。

ただしこのような問題設定の起源はラッツェルで, *Lebensweise, Kulturhöhe, Kulturstufe, ethnographische Merkmale* などの表現を用いている。(RATZEL, Friedrich (1882, 1891): *Anthropogeographie*, I, pp. 317-320, II, pp. 180-297, 577-781.)

なお最近ソルがこの概念について詳説している。(SORRE, Max (1948): *La notion de genre de vie et sa valeur actuelle, Annals de Géographie*, LVII, 97-108, 193-204.

ボベックは生活形態の語を詳しく説明していないが、別の所でこれを第1次・第2次・第3次生活形態に分け、それぞれ第1次産業・第2次産業・第3次産業を想定している。(BOBEK, Hans (1959): *Die Hauptstufen der Gesellschafts- und Wirtschaftsgestaltung in geographischer Sicht, Die Erde* XC, 259-298)

- 14) 社会学は行動 *behavior, Verhalten* と行為 *action, Handlung* の語は区別して用いられ、前者がよく広い概念とされている。しかしボベックもハルトケも特に区別をつけていない。なお行動様式 *behavior pattern, Verhaltensweise* の語は多かれ少なかれ固定化した行動の仕方をいうと定義されているので、同一行動の人間集団という語に代えて、行動様式集団という語を用いることは許されるであろう。(社会学辞典: 前掲書)。

II 社 会

シュトルケバウムによれば、社会の語はドイツでも一般に「使い古された語」で、厳密な定義なしにさまざまな意味に用いられて来た。地理学でも古くから用いられているが、主として純粋な量、すなわち人口を意味した¹⁵⁾。

現在の社会地理学では、ボベックの用語をそのまま用いれば、社会はいくつかの社会集団、ないしはその下位概念としての生活形態集団がいくつか集って形成された、より大きな複合体、抽象的でなく、一定の、具体的な、歴史的ならびに地域的に区画された複合体であるとされている。これとほぼ同じ意味を持つと判断される別の語として、Sozialkörper, komplexer Sozialkörper, Sozialgruppengefüge, Gesellschaftskörper などが用いられる。

これらの語にさまざまな箇所で断片的に付された説明を総合して見ると、一定の地域の社会的に組織された人口、一定の社会構造を持つ人口である。社会集団と異なる点は、それ自身の独占的な地域を持つこととされている。

社会学ではこの種の社会を社会的総体現象, soziale Totalerscheinung, または包括的社会 Globalgesellschaft などと呼ぶ。これをめぐって多くの社会学者が、一定の現象が純粋に統計的に大量に出現することは、必ずしも社会的性質を示すものではない。社会的法則性と統計的法則性とは決して同じではない。今日では社会的行為・集団・行動規範の錯綜した体系と考えている¹⁶⁾、ことが重要である。

すでに前節で示したように、地理学で考えている人間集団は必ずしも社会学者の考えている社会集団ではない。社会がその統合であるならば、地理学と社会学の社会は相互に異なるものとした方が妥当である。社会地理学においてはある行動様式集団が社会機能¹²⁾において卓越するような社会が重要である。そして社会からそれに特色を与えるような行動様式集団を取り出すのが第1の課題とされている。

もちろん分析の結果、地理学と社会学の社会が同一であるという結論に達する場合もあるかも知れない。しかし考察の観点や出発点は別で、それを明確に意識しておくことが、地理学そのものの問題設定を混乱させないために、また人間集団の社会機能の過程を歴史・文化・精神・社会諸科学の成果との関連において解明するために必要であろう。

ボベックは、この種の社会ないし複合社会体 komplexer Sozialkörper は内に人間営力の発生源としての社会集団を含み、人間の共同生活の本質的単位をなし、地域の自然に対抗して現われ、それと対決して様々な文化景観や生活空間 Lebensraum を創り出す¹⁷⁾、としている。

III 社会地域

人間集団に対して社会体は独自の排他的な地域を持つことを特色とするが、ボベックはこれに社会地理的単位, sozialgeographische Einheit, 社会地理的地域単位 sozialgeographische Raumeinheit などの名称を付し、ハルトケは単純に社会地理学的地域 sozialgeographischer Raum と称した。シェラーはこれを社会地域 Sozialraum と称し、シュタインベルクは土地利用や景観形成要因という点を十分に考慮しつつもハルトケのような精緻なマッピングの方法をとらず、統計でルール地域の総合的地域区分を行い、これ

15) STORKEBAUM, W. (1969) : 前掲書. 12.

わが国ではもつと広い意味に用いられているようである。(社会学辞典 (1958 : 前掲書, pp. 324-325)。

16) STORKEBAUM, W. (1969) : 前掲書. 12.

わが国では、これよりはやや広い意味で用いられている。(社会学辞典 (1958), pp. 324-325)。

17) BOBEK, Hans (1961) : 前掲書. Sozialgeographie, 102.

に社会統計地域 *sozialstatistischer Raum*, あるいは略して社会地域の名称を当てた¹⁸⁾。これらはなお術語として固まって居らず、われわれは単純に社会地域と称してよいのではないかと思う。

さて、社会地域と前節の複合社会体は相互に表裏の関係にあるが、ボベックは単なる示唆しか出来ないとしつつ、地域的に見た複合社会体として大きさの順に次の例を挙げている¹⁹⁾。

- I 集落（共同体に当る。行政地域とは一応別個である村落や都市）
- II 核心地域（都市の影響圏等）
- III 非核心地域
 - (a) ガウ的集落地域
 - (b) 炭坑地区
- IV 国家および民族
- V 文化地域および社会制度（社会制度としてかつてボベックの提唱した地代資本主義の社会・経済制度を例示している）

ここで生ずる疑問は示唆に過ぎないとはいえ例示されているのが主として社会学でいう共同体、地域社会、包括的社会などの核心地域、機能地域や統一地域²⁰⁾で、生活形態集団や行動様式集団の語から予想された等質地域は、炭坑地区を除いて見当たらない点である。もし炭坑地区としてルール地域が想定され、ルール都市連合やルール坑夫組合の地域という意味であるなら、原則的に等質地域は全く除かれることになる。なるほど核心地域等の研究は遅れ、それであるからこそ現在急速に進みつつあるわけであるが、その研究のみを以て社会地理学と称するとするなら、社会地理学の方法論に関する諸論文は矛盾だらけということになる。

筆者はここにも社会学の対象に引ずられ過ぎたドイツ社会地理学の混乱を認めざるを得ない。そこで複合社会体を例示したこの部分は一応除いて考え、社会地理学が本来目標として掲げた諸点を整理して見よう。ボベックは、社会地理学的考察法が地理学にもたらす利点として、次の5点を挙げている²¹⁾。

- i) これまで不完全であつた人間営力論に、より高い科学性を与えることが出来る。
- ii) 生活形態には、地域の条件への適応という側面と、社会の行動しつつある部分（景観あるいは核心地域形成という意味であろう——引用者註）という側面がある。社会を介してこの2側面を把えることによつて社会生態学が可能となり、それによつて一般景観生態学に参加出来る。
- iii) 地誌の課題にとり入れられる。
- iv) 人間社会の比較考察により、大文化地域と文化のより深い理解に役立つ。
- v) 歴史が地理学的事実によつて受ける影響という古来の問題は、社会の挿入によつて新しい基礎を得る。

ブッシュ・ツァントナーによりつつこれを若干補足すると、文化地理学における文化景観形成の営力が従来は集落・交通・経済などとしてばらばらに把えられていたのに対して、社会として統一的に把える基礎が得られるという。また人類地理学で考察されていた自然環境ないし地域の人間への影響が社会を媒介と

18) SCHÖLLER, P. (1953) : Die rheinisch-westfälische Grenze zwischen Ruhr und Ebbengebiete, Münster, p. 25.

STEINBERG, H. G. (1967) : Sozialräumliche Entwicklung und Gliederung des Ruhrgebiets, *Forschungen zur deutschen Landeskunde*, Bd. 166, pp. 159-162.

19) BOBEK, Hans (1961) : 前掲書. *Sozialgeographie*, pp. 89-102.

20) これらの用語の説明はここでは省略する。地理学におけるこの面の最近の業績としては、水津の力作がある。

水津一朗 (1969) : 社会集団の生活空間——その社会地理学的研究——. 大明堂.

統一地域については、次の著作によつた。

木内信蔵・西川 治(1955) : 地域論. 新地理学講座, 第2巻, 地理学本質論, 朝倉書店, pp. 245-292.

21) BOBEK, Hans (1948) : 前掲書. *Sozialgeographie*, pp. 53-58.

して扱えられ、文化地理学と人類地理学が統合出来るという。さらに人間営力においては経済が卓越するが、社会地理学的に見ることによって精神や文化の面も統一的に考察出来ることも強調している²²⁾。しかしこれらについては、今後とも理論的に精密化する必要は大きいと考える。

IV 社会地域と自然環境

ボベックは社会地理学の必要性を主張する際、パッフエンの自然人類地理学 *physische Anthropogeographie* の主張を批判して、大要次のように述べている²³⁾。

物質循環の問題はたしかに自然現象である。しかし同時に文化的事実であることを彼は見落していた。似たような自然条件で、異なる人間集団（社会経済集団の語を用いている所もある）が全く異なる方法で食糧問題を解決している。これは歴史的にも変化する。

飢餓は生理的現象である。しかしまた社会地理学の問題でもあることを忘れてはならない。病気の地理学的考察も、自然地理的観点のみならずは説明出来ない。病気の分布とその社会的意義は、文化的要素に支配されている。人間は動物とはちがう。

これはクレプスの比較地誌学や、自然地域を先ず設定し、その中での異なる人間の適応を論じた人類生態学の観点に近い²⁴⁾。社会地理学の具体的成果を見ると、着眼、視野、方法ははるかに広く精密化しているが、基本的にこれとあまり変らない問題設定が少なくない。すなわち同じような自然条件の地域に異なる景観、自然環境・土地の利用が見られる場合を取り上げ、その原因は何かと問う。そして行動様式のちがいが答として結論される。異なる行動様式の社会地域に、自然条件のちがいが特に重要でないのに、どのような異なる文化景観、自然環境・土地の利用が見られるか、という逆の問題設定の形式をとる場合もある。

ハルトケの社会的休閒、植林、村外農民の耕作などの研究は、労働者農民や農業市民の存在と、工業化の波及によるその考え方の変化に主な原因を求め、ルッペルトもほぼ同じ問題を論じている。ヴィーゲルマンは、社会的休閒がさらに民俗的慣習とも関係していることを指摘した。フッテンロッヘルの旧領邦の文化景観のちがいの概観、シェラーのラインラントとヴェストファーレンの境界の研究、首都圏と近畿圏の比較、ドイツ都市の部族地域や領邦のちがいによる特徴の概観、ボルヒェルトの伝統の強さによる農業技術革新の波及のちがいの研究、ヴィルトのシリアにおけるイスラム教徒とキリスト教徒の村の比較研究などがそれに当る。なかでもシェラーのラインラントとヴェストファーレンの境界の研究やヴィルトの研究は、自然条件との関係を通じて多面的な生活諸領域に議論が及び、有機的に統合された地誌に近いものとなっている²⁵⁾。

22) BUSCH-ZANTNER, Richard (1937) : Ordnung der anthropogenen Faktoren, *Sozialgeographie*, pp. 32-43.

23) BOBCK, Hans (1961) : 前掲書. *Sozialgeographie*, pp. 78-81.

24) BARROWS, Harlan H. (1932) : Geography as Human Ecology, *A.A.A.G.*, Vol. XIII, pp. 1-14.

WHITE, C. Langdon, & RENNER, George, T. (1936) : Geography. An introduction to human ecology, New York.

……(1948) : Human Geography. An ecological study of society, New York.

25) HARTKE, W. (1953, 1956, 1957, 1964) : 前掲書.

RUPPERT, K. (1955) : Der Wandel der sozialgeographischen Struktur im Bilde der Landschaft, *Sozialgeographie*, pp. 140-153.

WIEGELMANN, G. (1958) : Brachflächen und volkstümliche Traditionsformen, *Sozialgeographie*, pp. 326-339.

……(1962) : Wachstum und Wandlung japanischer Stadtregionen, *Die Erde*, 93 JG., pp. 202-234.

……(1967) : Die deutschen Städte, *Erdkundliches Wissen*, H. 17.

BORCHERT, Christoph (1961) : Die Innovation als Agrargeographische Regelercheinung, *Sozialgeographie*, pp. 340-386.

WIRTH, Eugen (1965) : Zur Sozialgeographie der Religionsgemeinschaften im Orient, *Sozialgeographie*, pp. 474-523.

これらとやや異なる問題設定と着想を含むのは、ウーリッヒのカシミールおよびジャウンサル・パワールの農民、移牧民、遊牧民の研究である²⁶⁾。異なる社会階層や生活形態・行動様式集団が、いかに異なる自然環境の土地を占拠し、いかに異なる自然環境利用を行っているかをも論じている。ブロンガーは異なるカーストの成員の村落の中での居住地区の分化、異なる自然条件の土地の利用を分析した²⁷⁾。

これら具体的な自然環境と人間の関係の社会地理学的考察の利点として、次の3点を説明のために補足することが出来よう。

- i) 答として人間や社会の側の要素が抽出される。すなわち文化景観形成や土地利用の地域の特徴と変動における動力因ないし動示的原因が得られる²⁸⁾。それはそのまま歴史的考察における原因として通用する。
- ii) 原因としての行動の動機づけまで知れる。
- iii) それによつて歴史・文化・社会・人間諸科学に通ずる設問の連鎖の糸口となり、自然環境の問題をこれらに媒介する橋渡しとなり得る。

多田は自然の形態を変化せしめる原因として内力、外力のほかに人力を加えたが²⁹⁾、社会地理学は人力の面を系統的に整理する1つの試みである。しかし現実には重要な行動様式集団を見分けるのがむずかしい。この点矢沢の気候景観の研究と似た面が少なくない³⁰⁾。

方法論的顧慮は少ないが、アメリカの文化地理学は行動様式に重点を置いて社会地理学の観点に近い³¹⁾、スタンプの土地利用研究は社会をあまり考慮しないが³²⁾、土地利用は文化景観より生産力的観点からのアプローチが容易で、これを社会地理学と結びつけてゆくのも今後の課題の1つであろう³³⁾。

(1973年5月29日受理)

26) UHLIG, H. (1961): Typen der Bergbauern und Wanderhirten in Kaschmir und Jaunsar-Bawar, *Deutscher Geographentag köln, 1961, Tagungsbericht und Wissenschaftliche Abhandlungen*, pp. 211-225.

27) BRONGER, Dirk (1970): Der sozialgeographische Einfluß des Kastenwesens auf Siedlung und Agrarstruktur im südlichen Indien, Teil I, *Erdkunde* XXIV, pp. 89-106, Teil II, pp. 194-207.

28) 岩波哲学辞典 (1930). 158.

29) 多田文男 (1964): 自然環境の変貌. 東大出版会.

30) 矢沢大二 (1953): 気候景観. 古今書院.

31) WAGNER, Philip L., & MIKESELL, Marvin W. (1961): *Readings in Cultural Geography*, Chicago and London.

32) Stamp, L. Dudley (1967): *The Land of Britain. Its use and misuse*, London.

33) この種の試みは少ないが、管見に入つた著作として次のものがある。

BROOKFIELD, H. C. &, BROWN, Paula (1963): *Struggle for Land*, Melbourne.